

# 戦後ドイツにおける脱ナチ化の様相（1）

## — ベルリンの場合 —

安 松 みゆき

### 【概 要】

小論では、戦後のドイツで、戦前のナチスの建物がどのように脱ナチ化を進めているのかを、ベルリンの建築に的を絞り、実見したデータを元にして、「破壊」「転用」「廃墟」の三つに分類し、その特徴を抽出した。それによって、脱ナチ化において、ナチスの紋章に象徴させることでその除去によって建物を破壊せずに脱ナチ化の条件を整え、さらにいかなる場合においても脱ナチ化にはナチスの罪過を記憶に留める説明板が不可欠であったことが把握し得た。

### 【キーワード】

脱ナチ化、ベルリンのナチス建築、ナチス建築の保存、イコノクラスム、負の遺産

## はじめに

ヒトラーの生誕地をめぐる、聖地化されることを排除するためにオーストリア政府が取り壊すというニュースが入ってきた<sup>1</sup>。ヒトラーが生まれて間もない頃に住んだとされ、オーストリア北部ブラウナウに残されていた建物である。しかし、取り壊すことが単純にすべてを解決する方法とはいえ、逆に何もなかったことにする歪曲行為にも繋がりがねない危険性を孕んでいる。そのように戦後ドイツやオーストリアにおいて、ナチス関連の建物の残存は、建物からいかにナチスの意味を消し去るかという重い難問を、いまだに突きつけられてきているといえる。

本稿では、そうした現状を受け、ナチス時代の建物が戦後どのようにナチスの意味を消し去ってきたのかを、その状況などから独自に分析および分類することで、ナチス関連の建物の現状と保存の特徴を明らかにしたいと思う。それによって負の遺産をいかに将来に向けて記憶させていくのか、その一助になることを目指したい。本稿は、具体的に首都ベルリンの場所に限定して考察する。

## 1 具体的な考察方法について

### 1.1. 分析と分類

まず分類を行うための方法を説明する。ベルリンに造られたナチス時代の建築については様々な文献が刊行されている。そのうち、当時のナチス建築のガイドブック的な書物であるマイク・コブネックによる『ベルリン *Berlin 1933-1945*』を中心に参考にして、まず残存状況からその

特徴が抽出可能な作例を選択した。つぎに該当する作例の現存状態を確認し、さらにその特徴を抽出して独自に分類した。

## 1.2. 具体的な分析対象と調査の実施

『ベルリン 1933-1945』のなかから、現存する建物で、後述するように特徴のある保存がなされている建物を選択条件として検索し、その結果、元空軍省、テンペルホフ飛行場、オリンピックスタジアム、親衛隊住宅、グリューネヴァルト駅、巨大荷重試験構造体、そして例外的に壊された例としてゲッベルス公邸、ヒトラー総統官邸、総統官邸防空壕を取り上げることにした。

2015年10月末に3日間の日程で、上記分析対象を現地にて現状の確認を行い、記録として写真撮影を実施した。その後、各建築の保存の特徴をふまえて分類し考察した。

## 2 脱ナチ化をめぐる分類

今回対象とする9棟の建物および駅のホームは、大きく「破壊」、「転用」、「廃墟」の三つに分類し得る。「破壊」とは、戦前に爆撃等で破壊されたものではなく、終戦によって破壊された事例を指す。「転用」は、戦後の使用目的が変えられた場合と、戦前と同様の使用目的であるものの、建物が増築、改築などが施された場合にあたる。「廃墟」は、戦前に造られたまま、戦後も残存しているが、使用目的を喪失している場合である。改築には、象徴的要素の除去を伴うもの、単に機能的な改築、さらにはデザインによるイメージの変更など、いくつかのパターンが見られる。また残存させる場合でも、保存措置のない「放置」と、文化財として意識的に保存される「警告の記念碑として保存」などが考えられる。「廃墟」という言葉は、ナチスを代表する建築家アルベルト・シュペーア (Albert Speer : 1905-1981) が、ツェッペリンフェルト Zeppelinfeld について、ローマの先例のように数百年後、崩壊した遺跡 Ruine として残る姿を思い描いて設計した、といった趣旨の発言を残し、実際にそうなっているとの指摘もあるので、ナチスの美学とも関わる重要なキーワードと見なしている。負の遺産の現実との関わりについてはヒトラー・ツーリズム Hitlertourismus という言葉があり、ヒトラーの山荘「ケールシュタインハウス Kehlsteinhaus」のように明らかに巨大な集客力を示している一方で、逆に前述のブラウナウ Braunau では、ヒトラー生家をその対象とすることを拒否した場合もある。

### 2.1. 分類1 「破壊」の事例

「破壊」に分類されるのは、終戦直後、戦後復興期に壊された建物である。

#### 2.1.1. ゲッベルス公邸 破壊と負の記念碑への変換

ヒトラーの側近のひとりであったヨーゼフ・ゲッベルス (Joseph Goebbels : 1897-1945) は、宣伝大臣としてナチス時代の文化政策を支配した人物である<sup>2</sup>。彼のベルリン市内の公邸は、ベルリンを象徴するブランデンブルク凱旋門のそばにあり、元は、プロイセン王家の敷地だったとされる (図1)。ナチス時代に入って、ゲッベルスが公邸とした歴史がある。

このゲッベルスの公邸は、終戦直後に破壊さ



図1 ゲッベルス公邸 (ベルリン市内、当時)

れ、およそ60年を経て、ナチス被害者のユダヤ人殺害の事実を追悼する記念の場（図2）に変えられた<sup>3</sup>。ベルリンの街のなかでも一等地といえる場所が、ドイツの歴史的な責任を認める負の記念の場に変えられるまでは、たやすい道のりではなかったことは容易に想像できる。その記念の場を説明するパンフレットの年表を参考にする<sup>4</sup>、1988年ころにジャーナリストのレア・ロッシュなる人物が『見過ごされることなき警告の記念碑』の建設を呼びかけて、元ドイツの大統領ヴェーリー・ブランド、ノーベル文学賞受賞者の小説家ギュンター・グラス、クリスタ・ヴォルフらに支持を受け、1994年から公開コンペが開催された。しかしすぐには成果があがらず、4年後にようやく実施案となる建築家ピーター・アイゼンマン（Peter Eisenman：1932-）の案（セラとの共同案）が当時のヘルムート・コール首相に支持されたという。しかし連邦議会選挙によってその決定は延期され、翌年1999年にドイツ連邦議会が建設を決議した。着工はさらにそれから4年後の2003年にはじまり、2004年に竣工し、ようやく呼びかけから20年近い2005年5月12日に一般公開となった。最終的な設計は、前述したユダヤ人の現代建築家アイゼンマンによる。作品は、コンクリートのシュテレ（Stele=石碑）といわれる柱2711基が敷地に並ぶものである。シュテレは横0.95m、縦2.38mとすべてが同じだが、高さに関しては、地面と同じ高さから4.7メートルの高さまでの幅で作られており、傾斜のある敷地に自在にかつ整然と置かれている。情報センターおよび展示室は敷地の南東端の地下に設置された。シュテレは、コンクリート製のため光を吸収し、周囲の光景を異質な空間に変化させている。時にシュテレは形状が石棺に近くなる。



図2 ナチス被害者のユダヤ人殺害の事実を追悼する記念の場

このようにゲッベルス公邸は、非常に明確に被害者の記念の場に転換することで、ナチスの否定が明確に示された。そのきっかけのひとつとして、この場所がベルリン市の最も中心にあたる場所だったことにもよる。すなわち、この記念碑のパンフレットに書かれていることだが、周囲には、設置の場所が新旧両時代を通じてベルリン市の中心部にあたることから、この否定を効果的なものにした。パンフレットにも書かれていることだが、当時のナチス政治の中心だったこの一帯には、現在も英国やスペインなどの大使館や文化施設、オフィスビル、また国会議事堂があり、その変容は、国政と民間社会の両面に向けてメッセージを投げかけるからである。

このようにゲッベルス公邸は、非常に明確に被害者の記念の場に転換することで、ナチスの否定が明確に示された。そのきっかけのひとつとして、この場所がベルリン市の最も中心にあたる場所だったことにもよる。すなわち、この記念碑のパンフレットに書かれていることだが、周囲には、設置の場所が新旧両時代を通じてベルリン市の中心部にあたることから、この否定を効果的なものにした。パンフレットにも書かれていることだが、当時のナチス政治の中心だったこの一帯には、現在も英国やスペインなどの大使館や文化施設、オフィスビル、また国会議事堂があり、その変容は、国政と民間社会の両面に向けてメッセージを投げかけるからである。

### 2.1.2. 「総統防空壕」(図3) 無関係な日常の場への変換と説明板

ヒトラーの総統官邸は、戦時下に破壊された。しかし、それについては後述するが、ヒトラーの防空壕となった地下設備は、いまも残存している。ヒトラーがそこで最後の105日間を過ごし、自殺したことで知られる場所でもある<sup>5</sup>。資料によれば<sup>6</sup>、いわゆる「総統官邸」は、「新首相官邸 Neue Reichskanzlei」にあたる。地下防空壕は、1935年の当初は150人の収容用として総統官邸とは別の「旧首相官邸 Alte Reichskanzlei」に造営された。それが1944年になると、総統と側近のための防空壕の一部に改築され、さらに140万マル



図3 総統防空壕（当時）

クを投じて基礎の深さ12m、側面と天井の厚みが4mの強度が増した防空壕が増築されて、いわゆる「総統防空壕 Führerbunker」となった。総統防空壕には20室が備えられ、ヒトラーと愛人エヴァ・ブラウンの生活の場としての部屋の他、ゲッベルスや、従医者ルートヴィヒ・シュトゥムプフェッガーの部屋（寝室含）、マルティン・ボルマンの仕事部屋が用意されていた。

終戦後の動きとして、資料には、1947年にソ連によって「総統防空壕」の前室にあたる部分 Vorbunker の調査が行われ、ベルリンの壁が壊される一年前の1988年になって、東ドイツがその敷地に新しい建物を造るために、主要防空壕の天井を壊し、床板や壁が一部残されたことが記されている<sup>7</sup>。さらに1990年にはエベルト通り Ebertstrasse に240平方メートルの大きなヒトラー公用車運転手のための防空壕 Fahrerbunker も発見された<sup>8</sup>。しかし、ベルリン市はネオナチの巡礼地になることを危惧して、再び埋め戻したという<sup>9</sup>。現在、「総統防空壕」は（図4）、集合住宅に隣接する駐車場の下に残存するものの、地上にはその痕跡は全く認められない。



図4 総統防空壕の地上部

このように「総統地下壕」は、地下に埋もれているとはいえ、終戦直後に一部壊されながらも現存している。ヒトラーの最後の場となった「総統官邸地下壕」は、最も象徴的な意味を持つ。それゆえに、最も慎重に非ナチ化を実現しなければならない対象といえる。それに対して、ドイツは、最も無関係な日常の場所、すなわち、埋め戻してたわいもない駐車場とすることで、地上からは完全にその姿を消し去ると同時に、その象徴的な意味も消去する方法をとったのである。

ただしその際に見落してならないのは、ドイツの姿勢が、人々の記憶からすべてを消し去ろうとしたわけではなかったことである。「総統地下壕」の埋まる駐車場に説明板（図5）を立てて、内部の図面を見せてその現存をイメージさせることにより、負の記憶を呼び戻す場所であることを伝えている。目には見えずとも、現実には存在し、また思考のなかにも存在することを示すかたちで保存されているところに、大きな特徴がある事例と理解される。



図5 総統防空壕を示す説明板

### 2.1.3. 総統官邸とソ連英雄記念碑（図6）

#### 破壊のうえ、素材の転用

ヒトラーの総統官邸は、古典的な建築家シュペーアによって造られ、まさにナチスを代表する様式を示す象徴的な建築となった。しかし爆撃を受け、破壊された。そして戦後、ソ連軍は、その総統官邸の石材を用いて、ナチスに勝利した英雄記念碑 Sowjetischer Ehrenmal im Treptower Park を1949年に造営した<sup>10</sup>。この記念碑は現在ベルリンの旧東ドイツ領域のトレプトウ公園に現存している。



図6 ソ連英雄記念碑

## 2.2. 分類2 転用の事例

転用とは、既述のように戦後の使用目的が変えられた場合と、戦前と同様の使用目的であるものの、建物が増築、改築などが施された場合に当たる。

### 2.2.1. グリュネヴァルト駅17番線（図7）負の記念碑への転用

ナチスのユダヤ人大量虐殺への第一歩として、鉄道移送の手段がとられたことはよく知られている。ベルリンのユダヤ人を強制収容所や絶滅収容所に移送したのは、グリュネヴァルト駅の17番線からだった。シュタインガルトによると、1941年10月18日に帝国鉄道特別列車第一号が、この駅から1251人のユダヤ人を東方に運んだという<sup>11</sup>。それ以後1941年からのわずか4年間に180本以上の列車で5万535名のユダヤ人が東方に移送された。列車は当初三等客車だったのが途中より家畜用貨物列車に代わり、劣悪な車内で死ぬ者も続出したとされる<sup>12</sup>。この施設の存在から、絶滅収容所だけでなく、移送そのものも絶望的な状況だったことが理解される。

グリュネヴァルト駅そのものは、現在もベルリンとポツダムを結ぶSバーンの駅として使用されている。この駅の忌まわしい過去は、17番線の施設を負の記念碑として明示する方法で伝えられ、非ナチ化が行われている。具体的に、いまは使用されておらず、屋根のない17番線の両側のホームの上に、この駅から出て行った移送列車と同じ数の鉄板を敷き詰めたのである。その鉄板には、列車の出発した日付、移送された人数、目的地が刻まれている（図8）。さらに、ホームにあがる階段の壁面には、ドイツ連邦鉄道の名において「17番線。1941-45年にドイツ帝国鉄道の列車によって死の収容所への移送された人々を追悼して」と記載された銘板が残されている。

銘板としての鉄板を敷き詰めるだけで、ホームに一切手を加えることなく、その当時を記憶によみがえらせている。その方法によってこの施設をひとつの負の記念碑へと変えることで非ナチ化を実現している。

### 2.2.2. オリンピック・スタジアム（サッカーワールドカップ ドイツ大会会場）（図9）イメージの変更による脱ナチ化 ナチスの象徴を取り除く方法

1931年に夏のオリンピックのベルリン開催が決定し、ヒトラーのもとで大々的に実施されることになった。建築家ヴェルナー・マルヒ（Werner March：1894-1976）が当初10万人収容できるメイン会場となる競技場を、鉄筋コンクリート製の、柱間にガラスのはめ込まれた近代的なデザインで設計したが、ヒトラーは、シュペーアに外装を石灰石のプレートで覆う改築をさせた<sup>13</sup>。そして1936年8月1日に第11回夏のオリンピックがヒトラーの下で開催された。

現在、ナチス時代のスタジアムの外観は変えられておらず、また、入り口の門も、オリムピックの五輪をつり下げ、ほぼ当時のま



図7 グリュネヴァルト17番線

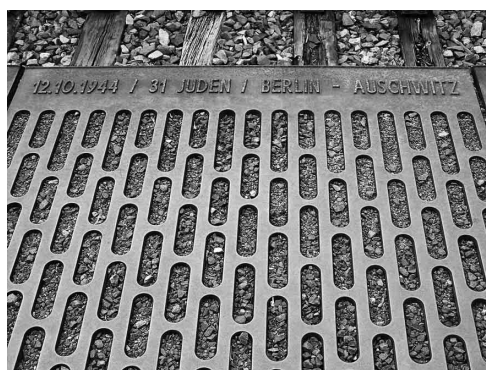


図8 ホームに敷き詰められた鉄板



図9 オリンピックスタジアム入口門

まの姿を見せている。

このようなスタジアムにおいて非ナチ化はいかに行われているのかといえば、利用目的をサッカースタジアムとして、観客席に軽快なガラスの屋根をかけて、イメージを一変させたことがあげられるだろう。記憶に新しいのは、サッカー・ワールドカップのドイツ大会のフィナーレ会場として使用されたことである。

さらにもう一つ指摘しておきたいのは、入り口の「オリンピックの門」を形成する二本の支柱のうち右の柱上部から、当時のナチスのシンボルである逆卍の印が取り除かれていることである（図10）。逆側の左の支柱上部には当時からの時計はそのまま掛けられている。つまりたった一つ当時と異なるのは、逆卍のみなのである。しかし他の例にも示されるように、建築それ自体の脱ナチ化を目指すより紋章などの象徴的要素をナチスの顕現と見なし、建築本体を残したままその除去を進めるといった方法が、常套手段の一つになっている。これにより建築資産の活用が可能になると同時に、象徴をはぎとるという演出によって、かえって脱ナチ化が強く印象づけられることになった。前畑秀子が金メダルをとった隣接する水泳会場も、建物は規模を縮小して使われるが、逆卍は取り除かれている。



図10 オリンピックスタジアム入口門（当時）

### 2.2.3. テンペルホフ空港 同機能で継続使用（近年使用停止）

国際空港としてエルンスト・ザーゲビール(Ernst Sagebiel：1892-1970)によって1939年に造営されたのが、テンペルホフ空港である（図11）。マティアス・ドーナートによれば、ザーゲビールは、当時の規模からすると、それ以前に比べて30倍に高まった需要に応える巨大な施設を計画した。その計画の元はヒトラーによる可能性がある。空港の建物は四階建てで、正面ファサードには、モニュメンタルなデザインがとられ、水平方向につづくバルコニーと、それに並行して21の出入り口が設置されている。また縦長の窓が整然と並んでいる。そして最上階中央には、4.5メートルの巨大な鷲が据えられた<sup>14</sup>。出迎いのロビーは1.3キロメートルの長さを誇り、そこには、出発ロビー、待合室も含まれている。当時ヨーロッパのなかで最も近代的な空港だったという<sup>15</sup>。



図11 テンペルホフ空港(当時)

戦後テンペルホフ空港は、ソ連に封鎖された西ベルリンに空輸作戦を行った空港としても知られるが、機能としてはそのまま空港として近年まで利用されてきていた（図12）。現在は空港の役割を終えて、滑走路の部分は公園に変えられている。



図12 テンペルホフ空港

テンペルホフ空港は、戦前と同じ機能で利用されていたものの、歴史の偶然から自由と友好を象徴する場所となることで意味の転換が進んだのである。

さらに、ここでも鷲の象徴が取り除かれていることは見逃せない。しかもそれには、やや失笑を禁じ得ないような歴史がある。『世界 Die Welt』の記事によれば、アメリカ軍は、テンペルホフ空港の屋上に設置されていたナチス・ドイツの鷲の像を脱ナチ化の対象と見なした。しかし重さ10トンにもなる巨大な彫刻を撤去するのは困難であったので、この鷲を白いペンキで塗装して、アメリカの白頭の鷲に変えるという妙案を思いついた。その後、1962年にレーダーシステムの設置に伴い、ようやく鷲の像は撤去され、頭が切り取られてニューヨークの軍事アカデミーに寄贈されたが、1985年にドイツとアメリカの友好の象徴として返還された。今日、鷲の頭は、まるで断首の刑に処されたかのように、空港前広場の入口付近に置かれている（図13）。



図13 ナチス時代の鷲の頭部

このように、テンペルホフ空港では、自由の場とされたこと、鷲を建物から取り除き、その首だけを戸外の広場にモニュメントとして設置したことが、非ナチ化を象徴していると理解されるだろう。

#### 2.2.4. 財務省（旧空軍省）（図14）

##### 象徴の脱ナチ化

1936年にテンペルホフ空港を手掛けたザーゲビルによって造営された空軍省の建物である。当時2000室を備えたベルリンでもっとも大きな建物として知られ、ゲーリングがその主だった。戦中には爆撃に一回だけあっただけの状態で、東ドイツ時代には、経済委員会として使われていたという<sup>17</sup>。現在は財務省として用途を変更して使われている。



図14 空軍省（当時）

ここで認められる非ナチ化は、用途の変更とともに、象徴となる建物中央上部に置かれた鷲の除去による（図15）。テンペルホフ空港と同様の理由である。さらに説明板も置かれている（図16）。



図15 現在の財務省（元空軍省）



図16 現在の財務省の説明板

### 2.2.5. 親衛隊住宅 (図17)

#### 説明板で脱ナチ化

1938年から2年間かけて、ハンス・ゲルラハ Hans Gerlach GAGFAH によって親衛隊の集合住宅が造られた。ヒムラーが、ベルリンの親衛隊本部の隊員だけが住む住宅地が必要であると述べていたという。広い敷地内に、一棟タイプと、連続するタイプが整然と建てられている。日本の軽井沢のように森のなかにある。

現在でもそのまま残存し、一般市民の住宅として利用されている。市民のための住宅であることが、ひとつ脱ナチ化の方法といえる。とはいえ、住宅群は当時のままではほぼ変更がない。そのため、歴史的に負の遺産であることを明示する説明板を建てていることで、脱ナチ化を示している。



図17 元親衛隊集合住宅群

歴史的に負の遺産であることを明示する説明板を建てていることで、脱ナチ化を示している。

### 2.3. 分類3 廃墟の事例

「廃墟」は、戦前に造られたまま、戦後も残存しているが、実用目的のない場合である。改築には、象徴的要素の除去を伴うもの、単に機能的な改築、さらにはデザインによるイメージの変更など、いくつかのパターンが見られる。保存措置のない「放置」と、文化財として意識的に保存される「警告の記念碑として保存」などが考えられる。

#### 2.3.1. パラス通りの防空壕 (図18)

パラス通りには、戦争末期の1943年から1945年にかけてソ連からの強制労働者によって防空壕が造られた<sup>18</sup>。その向かいにはかつてスポーツ宮殿があったが、爆撃で壊されたという<sup>19</sup>。戦後になって防空壕を破壊することが試みられたが、連合軍は技術的に破壊できずに、1970年代に集合住宅に組み込まれた。この遺構については、2007年7月23日の新聞『ターゲス・シュピーゲル *Der Tagesspiegel*』<sup>20</sup>でも紹介されている。それによると、戦後、病院のベットを収納する倉庫として使用されていたという<sup>21</sup>。また戦前にソ連から強制的に連行された労働者によって造られたことが、当時の体験者からの手紙をきっかけに明らかとなり、その動きから保存へと発展したとされる。現在では、その体験者と直接の関係をもって保存に一役かった「ゾフィー・ショル高校 *Sophie-Scholl-Oberschule*」が、防空壕の向かい側に学校があるという立地条件もあわせて、芸術系の授業や展示スペースとして使用されている<sup>22</sup>。



図18 パラス通りの防空壕

#### 2.3.2. 巨大荷重試験構造体 (図19)

ヒトラーが目論んだ世界の中央都市ゲルマニア *Germania* の軸線に、凱旋門が計画された<sup>23</sup>。高さ117メートル、幅170メートルの巨大な規模のもので、設計者シュペーアは、その巨大な荷重の試験の

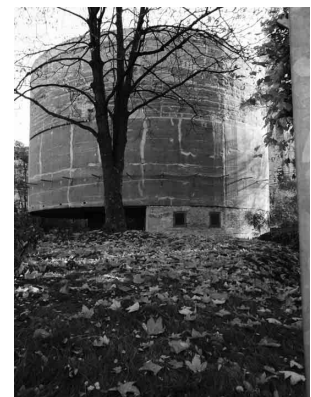


図19 巨大荷重試験構造体



ために、直径21メートル、高さ14メートル、地下18メートルの大きさのコンクリート製のシリンダー状の構造体を1941年に造った。戦後解体されることもなく長らく放置されてきていたが、現在負の遺産としての保存が進められ、すぐ真横に見学用の階段が設置され、また負の遺産であることの説明板を立てている（図20）。



図20 巨大荷重試験構造体の説明板

### 3 ベルリンに現存するナチ建築と脱ナチ化

最後にベルリンのナチ時代の建物が、前述した三つの分類において、いかに脱ナチ化を進めているのかを改めて確認する。

「破壊」「転用」「廃墟」のどの形にせよ、ナチス建築の脱ナチ化は容易ではない。忌わしい過去と結びついた建築を「破壊」によって視界から除去すれば、それは忘却へとつながる。「転用」はナチス建築の肯定や聖地化につながりかねず、また「廃墟」として放置すれば、かえってナチスの美学を想起させることになる。記憶を伝えつつ、否定の対象とするにはどうするのが、三つの方法のいずれにとっても課題となる。

今回のベルリンの遺構では、いくつかの典型的な脱ナチ化の方法が取られていた。まず、ナチスのシンボルにその忌まわしい過去を集約する方法である。それは旧空軍省やオリンピックスタジアム、テンペルホフ空港において認められた。建物はほぼ当時のままに残され、別の目的で転用されていたり、あるいは当時のままの利用も引き継がれている。それでも脱ナチ化といえるのは、ナチス時代の鷲の紋章が削除されていたからである。たとえばテンペルホフ空港では、鷲の首だけを残して広場に展示することで、テンペルホフ空港のナチスの歴史を伝えていた。建物から象徴的要素を削除するという行為によって、ナチスへの否定を示すこの方法は、むしろそれが付けられていた建物が存続することで、はじめて成立するといえよう。

ただし、それだけでは記憶に留めるには十分とはいえない。説明板の役割が不可欠となる。当時のままに残されている建物はもちろんのこと、ヒトラーの防空壕のように、地下に埋め戻して地上ではなにもない日常の光景に変えてしまったとしても、そこには負の歴史があることを、説明板によって記憶をよみがえらせている。グリュネバルト17番線もそうだったように、脱ナチ化とは、なによりもまず記憶にとどめるところから始まるのである。

#### おわりに

ナチス時代の傷跡を傷のまま、目で見えるかたちで示す方法もあれば、傷を隠して、別の用途で示す方法もある。いずれもなぜ傷になったのか、その過去の記憶をそこで思い起こす方法もあわせて進められなければならない。ナチス時代の建物から脱ナチ化することは簡単なことではない。今回のベルリンで取り上げた建物は、脱ナチ化の方法として「破壊」「転用」「廃墟」に区分することができた。そのなかで、紋章などの象徴的要素の除去によって、建物を破壊せずに脱ナチ化を進める方法と、説明板の設置による記憶の喚起とが、効果的な方法として広く用いられている。

ベルリンは戦後東西に分断されたため、恐怖政治の東ドイツの遺構も残されている。ベルリンではいま、ナチス時代の建物と、東ドイツ時代の建物とを合わせて、恐怖政治の観光が進められている。脱ナチ化の多様な方法は、決して社会において否定的な役割とならず、将来に多くの示唆を与えてくれる。

本稿は、科研（基盤研究（B）、代表：丹尾安典、期間：2015-2019年、課題番号：15H03179「日本近代における〈イコノクラスム〉—破壊をめぐる視覚表象研究」）によって行った調査の成果の一部をまとめたものである。

- 1 朝日新聞デジタル、2016年10月19日  
(<http://www.asahi.com/articles/ASJBL54W9JBLUHBI01Q.html>)
- 2 ロベルト・S・ヴィストリヒ編『ナチス時代ドイツ人名事典』（滝川義人訳）東洋書林、2002年、72頁。
- 3 敷地の北西の一角には、ゲッベルスの地下防空壕が残されているという。
- 4 『インフォメーション 虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑』*Denkmal für die ermordeten Juden Europas* の和訳パンフレット、Stiftung Denkmal für die ermordeten Juden Europas 発行。発行年と頁の記載なし。
- 5 アンドレーア・シュタインガルト『ベルリン、＜記憶の場所＞を辿る旅』（谷口健治他訳）昭和堂、2006年、98頁。
- 6 Maik Kopleck: *BERLIN 1933-1945*, Berlin 2005, S. 11-15.
- 7 Maik Kopleck, a.a.O., S. 15.
- 8 Maik Kopleck, a.a.O., S. 15.
- 9 Maik Kopleck, a.a.O., S. 15. アンドレーア・シュタインガルト、前掲書、98-101頁。
- 10 石材を総統官邸から転用されたが、どの部分にどれだけ使われたのかは不明。イーゴリ・ゴロムシトク『全体主義芸術』（貝澤哉訳）、水声社、2007年。マイク・コプレクによれば、中央の銅像の基盤に使われたとされる。Maik Kopleck, a.a.o., S. 56.
- 11 アンドレーア・シュタインガルト、前掲書、69頁。
- 12 アンドレーア・シュタインガルト、前掲書、70-71頁。
- 13 アンドレーア・シュタインガルト、前掲書、63頁。
- 14 Maik Kopleck, a.a.O., S. 54f.
- 15 Matthias Donath: *Bunker, Banken, Reichskanzlei, Architekturführer, Berlin 1933-1945*, Berlin 2005, S. 79.
- 16 Anna Valeska Strugalla: Pragmatismus machte das NS-Wappen zum US-Adler, in: *Die Welt*, 10. 07. 2014.
- 17 Maik Kopleck, a.a.O., S. 15.
- 18 *Innen-Aussen, Objekte II Installationen II Fotoarbeiten*, Ausstellungskatalog, Künstlerische Arbeiten von Schülerinnen und Schülern der Sophie-Scholl-Oberschule, Berlin 2008. またインターネットでは、ベルリン在住とされるフリーライターの中村真人氏のブログのなかでもこの防空壕について、そのまつわる話とともに紹介している。「ベルリン中央駅」<http://berlinhbf.com/about/>
- 19 Maik Kopleck, a.a.O., S. 53.
- 20 <http://www.tagesspiegel.de/berlin/zivilschutz-genug>
- 21 中村真人氏の HP でも指摘されている。 <http://berlinhbf.exblog.jp/4932599/>
- 22 ゴフィー・ショル高校の沿革のなかに防空壕にまつわる話が紹介されている。  
<http://www.geschichte.sophie-scholl-schule.eu/>
- 23 Maik Kopleck, a.a.O., S. 53. Matthias Donath, a.a.O., S. 76.

## 図版出典

- 図版 1 <http://www.hitlerpages.com/pagina28.html>  
図版 2、4、5、6、7、8、9、12、13、15-19 筆者撮影  
図版 3 <http://forum.axishistory.com/viewtopic.php?t=109709&start=255>  
図版10 [http://sechtl-voesecek.ucw.cz/cml/dir/berlin\\_1936\\_35mm.html](http://sechtl-voesecek.ucw.cz/cml/dir/berlin_1936_35mm.html)  
図版11 <https://www.welt.de/geschichte/article130006945/Pragmatismus-machte-das-NS-Wappen-zum-US-Adler.html>  
図版14 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bundesarchiv\\_Bild\\_146-2006-0118,\\_Berlin,\\_Reichsluftfahrtministerium.jpg?uselang=de](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bundesarchiv_Bild_146-2006-0118,_Berlin,_Reichsluftfahrtministerium.jpg?uselang=de)  
図版20 [https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Schwerbelastungskörper\\_\(B](https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Schwerbelastungskörper_(B)